

生成としての知 ——共創と応答の映像実践に向けて

澤崎賢一(総合地球環境学研究所)、大場 豪(人間文化研究機構)、駒居 幸(人間文化研究機構)

トークセッション 2025 年 11 月 8 日 13 時～ | 会場：Project Works Venue1

人間文化研究機構の共同研究プロジェクト「イマジナリー・ダイアログ:映像・AI・芸術による参加型「問い」創出の学際的实践」は、実践に至る前段階の「構想」の豊かさに着目し、それを学術的な資源として捉え直す方法論的实践である〈イマジナリー・ダイアログ〉の展開を通じて、知の創出を「完成された成果」としてではなく「関係性や逸脱を含む生成的出来事」として再構築する試みを実施している。

今回の上映&ディスカッションでは、カトマンズ・ネパールで開催された AAS(Association for Asian Studies) in Asia 2025 において、文学、言語学、人類学、建築、芸術など多様な分野の「イマジナリー・ダイアログ」プロジェクトのメンバーが集まり、共同セッション「Documenting Crises and Disasters: A Transdisciplinarity Tryout for Liberal Arts Communication」に参加した際の記録映像とその後の編集成果を上映する。学会での発表のみならず、**移動、観光、対話**

といった活動の「余白」に着目し、各自が自らの経験に焦点を当て、映像で記録した素材をもとに編集を行い、**当事者参加型の映像制作手法〈メタ／コモンズ映画〉**(澤崎, 2024)として構成する。

上映とあわせて、制作プロセスの共有や対話セッションも実施し、経験的「問い」の発見や生成の瞬間に内在する創造性・身体性・倫理性を多角的に議論する。このような方法論的实践によって、「知」を制度的成果物ではなく、共創と応答の場として再考する。

カルチュラル・タイフーン 2025 においては、映像展示と対話の空間を通じ、「問いを生み出す」という知的営為を開かれた公共的なプロセスとして提示する。

キーワード:「注釈」「ポリフォニー」「当事者参加」「物語」「コモンズ」「メタ的視点」「ドキュメンテーション」

参考文献: Sawazaki, K., et al. (2024). *Emergent Use of Visual Media in Young Muslim Studies*, TRAJECTORIA Vol.5, 2024

国際学会「AAS in Asia 2025」 (2025 年 6 月、カトマンズ・ネパール)

「危機／災害」をめぐる「記録」のあり方を、文学・文化人類学・言語学・芸術実践を横断して検討した。記憶や経験、口承など無形の現象に加え、権力関係や研究者／当事者の関与、意思決定の過程を可視化した。事前ワークショップと映像記録を用いて協働研究の生成プロセスを共有し、リベラルアーツ・コミュニケーションの新手法を提案した。



AAS in Asia 2025 (ネパール) で〈コモンズ映画〉を実施

〈コモンズ映画〉 ——素材を「みんなの場」にする運用

〈コモンズ映画〉は、参加者全員が撮影者／編集者となり、素材を共同リポジトリで共有資源として扱いながら制作を進める手法です。共同編集セッションや小規模の公開試写を繰り返し、異なる立場の編集判断を作品に刻み込みます。表象の倫理を更新し、制作過程を社会にひらかれた対話として位置づけます。

事例:プロジェクト「ヤングムスリム窓: 芸術と学問のクロスワーク」(2022～)

コモンズ映画

応用実践



駒居 幸(日本近現代文学)『眼に映る』
8 分 54 秒, 2025

カトマンズ滞在 4 日目、警官の職質と撮影禁止をめぐる一件から、撮る者／撮られる者、ネパール人／外国人の非対称な視線と権力が浮上する。移動や観光といった「余白」の記録を手がかりに、国際学会の権威や「パチモン Dior」などの記号が〈誰が見られ、信じられるか〉を左右する過程を自己言及的に検証。消去を強いられた映像の「不在」まで含め、境界の曖昧さと身体の緊張を可視化する。



横山 晶子(言語学)『ネパール：言語習得の楽しさを知った旅』
6 分 26 秒, 2025

教科書ではなく「使える 20 フレーズ」から始めた超初級ネパール語を現地で実践。空港や市場で通じる喜び、デヴァナーガリー文字習得の難しさや音の区別の重要性、フレーズ先行が動機づけを高める効果を体感。市場散策や交流、民族衣装での発表を通じ、危機言語の“新しい話者”育成に向けた学習設計を〈研究者であり学習者〉の視点から見直す記録。



大場 豪(建築学)『移動』
3 分 6 秒, 2025

19 時間遅延の末に着いたカトマンズで、機内からのヒマラヤ、車幅ぎりぎりの路地での後退交渉とバイクの割り込み、クラクションが響く帰宅ラッシュ、チップをねだる“クジャク”の所作を無音で記録。交通と余暇に表れる視線・合図・譲り合いのマイクロ交渉を、都市のリズムとして建築的にスケッチする短篇。



工藤 さくら(文化人類学)『不安定な現実』
9 分 15 秒, 2025

約 20 年ネパールに通う文化人類学者が、フライト中止・遅延やロストバゲージ、デモによる封鎖など“危機”続きの旅で、ガイド／研究者／発表者という役割の間で引き裂かれる。学会テーマ「Documenting Crisis and Disasters」を自身の体験へ引き寄せ、現地の生活感から切り離された同行の世界に自分をどう位置づけるかを再考。都市の渋滞やデモの不安定さの中で、「他者は何を感じたのか」という問いを、観察と当事者性の間で編み直す。

今後の展開として

- ・プロジェクトメンバー全員の映像作品を考察しながら、メンバーのひとりで〈コモンズ映画〉の提唱者でもある澤崎が中編映像を制作予定
- ・〈コモンズ映画〉に挑戦した各メンバーの専門領域におけるフィードバック、応用的活用の可能性を考察→国内外ジャーナル投稿
- ・2025 年度内の国内上映会＋ディスカッションを計画中